



K230.82

4f

1

高橋龍雄著

改訂 女子國語新文典

東京

株式會社 啓成社 發兌

改訂 女子國語新文典

はしがき

女子の教育において、少しにても理窟がましきことを教ふるは、いと困難なることなり。女學校にて國文法の教授のむづかしきも、これが爲に外ならず。

殊に、たびの改正は、舊令に比して、文法の時間も減りたれば、思ひきつてやさしき教科書を編むにあらざれば、これが教授に苦しむものあるべし。

かるかゆるに、すべての説き方をやさしくし、誠にわかりよく、憶えやすからしめ、爲に、これが改修に腐心せるところ少ならず。

はしがき

大正
1.10.28.
丙午

たとへば動詞の活き及その假名遣の如き、あるは動詞と助動詞のつゞく具合、もしくは形容詞と形容動詞との如きものにおいて、頗る心をこめて、その説明及記述をなせる所は、教授せらるる人の注意して見られむことを望む。

女子の文章には、體詞をも假名書きにすること多ければ、國語假名遣を教ふる必要あり。新令教授要目にこれを載せずと雖も、この教科書には、下巻の附録としてこれを掲げたり。國語の書き方綴り方と併せて、教授せらるる便多かるべきを信じたればなり。

大正元年八月二十三日

高橋龍雄

訂改 女子國語新文典 五卷

目次

第一編 品詞の概要

第一章	名詞	一
第二章	代名詞	二
	練習問題	
第三章	副詞	四
第四章	接續詞	四
	練習問題	
第五章	感動詞	六
第六章	助詞	七

第七章	動詞	練習問題	九
第八章	助動詞	練習問題	一〇
第九章	形容詞	練習問題	一三
第二編	用詞の詳説	◎復習雜題	一四
第一章	動詞		
第一節	四段活	練習	一七
第二節	四段活の音便	練習	一八

第三節	上二段活及下二段活	練習	二四			
第四節	上一段活及下一段活	練習	二五			
第五節	變格の動詞	練習	二六			
第六節	形容動詞	練習	二七			
	◎復習雜題		二八			
第二章	助動詞					
第一節	受身	可能	使役	敬語	練習	三〇
第二節	打消	推量	當然	練習	三一	
第三節	時	指定	練習	三二		
第三章	形容詞					
第一節	形容詞の種類	練習	三三			

第二節 形容詞の口語及音便——練習…………… 壹

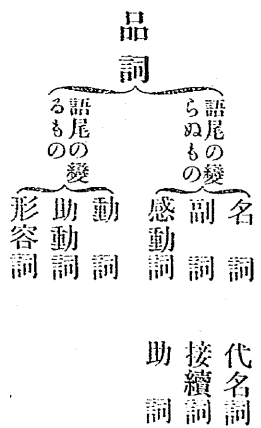
◎復習雜題…………… 亥

目次終

訂改 女子國語新文典 上卷

第一編 品詞の大要

ことばの種類を品詞といふ。わが國語の品詞には九種あり。



第一章 名詞

名詞とは事物の名をあらはす詞なり。

机の上に書物あり。

東京はわが國の首府なり。

右の文にて「机」上「書物」東京國「首府」の如き語は名詞なり。

第二章 代名詞

代名詞とは、名詞の代りに用ひらるる詞なり。

それをここに持ち來れ。

私は貴方にこれをあげませう。

右の文にて「それ」ここ「私」貴方「これ」の如き語は代名詞なり。

名詞と代名詞とを併せて體詞といふ。

練習問題

次の文中より體詞を指示し、これを名詞と代名詞とに分けよ。

- 一 櫻はわが國の名花なり。
- 二 塗板の上に、掛圖があります。
- 三 こゝに硯と筆とインキとあり。
- 四 あなたは文典を習ひましたか。
- 五 私は學校でそれを學びました。

第三章 副詞

副詞とは、その下に來る詞の意味を限定する詞なり。

自轉車は早く走る。

櫻の花は誠に美し。

汽車は實によく走る。

月煌々と輝く。

右の文にて「早く・誠に・實によく・煌々と」の如き語は副詞なり。

第四章 接續詞

接續詞とは、語句または文章を接續する詞なり。

文典および讀本を學ぶ。

春はきぬ。されど、寒さは去らず。

右の文にて「および・されど」の如き語は、接續詞なり。

次の文中より副詞と接續詞とを指示せよ。

- 一 風は寒し、されど雪は降らず。
- 二 空青々と晴れわたれり。
- 三 自動車は甚だ早く走る。
- 四 我は唱歌および裁縫を學ぶ。
- 五 よく泳ぐものは水に溺る。

次の文の空所に、副詞(◎◎)、接續詞(△△)を入れよ。

- 一 今日(◎◎)御寒(う)御座(います)。
- 二 昨日(△△)は裁縫(△△)料理(を)學(び)たり。
- 三 あの子(◎◎)は母親(に)似(て)る(ます)。
- 四 春(は)◎◎來(り)ぬ。△△寒(さは)◎◎去(らず)。

第五章 感動詞

感動詞とは、感動したるとき發する詞なり。

ああ 樂しきかな
さあ 參りませう。

右の文にて「ああかなさあ」の如き語は感動詞なり。

第六章 助詞

助詞とは、語の下にありて、他の語との關係を明かにする語なり。

我(は)讀書(を)好(む)。
 か(の)人(も)學校(に)行(く)。
 わ(が)庭(の)櫻(ぞ)咲(き)け(る)。
 日曜(な)れ(ば)友(人)と公園(へ)行(く)。
 これ(を)彼(より)勝(り)た(れ)。

東京から横濱まで行く。

右の文にて「はを」も「にがのぞ」は「とへこそよりか
らまで」の如き語は助詞なり。

練習問題

次の文中より感動詞と助詞とを指示せよ。

- 一 鹿を追ふ獵夫は山を見ず。
- 二 猿も木から落ちる。
- 三 噂をすればかげがさす。
- 四 すきこそ物の上手なれ。
- 五 ああ我が友も遂に逝きぬ。
- 六 大阪より馬關まで行きけり。

第七章 動詞

動詞とは事物の動作をあらはす詞なり。

花咲く。

鳥鳴く。

山を見る。

人を教ふ。

右の文にて「咲く」「鳴く」「見る」「教ふ」の如き詞は、動詞
なり。

次の文中より動詞を指示せよ。

- 一 よく遊び、よく學ぶ。
- 二 雨降り、風吹く。
- 三 習ふより慣れよ。
- 四 花は散りても、實を結ぶ。

五 空晴れて、雲を見ず。

次の空所に動詞を入れよ。

- 一 公園にて○○○○て○○む。
- 二 書物を○○○○て○○。
- 三 蝶は花に○○、蜂は蜜を○○。
- 四 書を○○、字を○○、又書を○○。

第八章 助動詞

助動詞とは、主として動詞に添はり、稀に他の詞に添はりて、その意義を助くる詞なり。

人に笑はる。 人に譽めらる。

字を寫さしむ。 速に行くべし。

人の悪を言はず。 蒔かぬ種は生えぬ。

昨日も雨降りぬ。 花は散りたり。

花は咲きけり。 学校に行きき。

学校に行かむ。 われは生徒なり。

右の文にて、る、らる、しむ、べし、ぬ、ず、ぬ、ぬ、ぬ、た、り、けり、き、む、なりの如き語は助動詞なり。

練習問題

次の文中より助動詞を指示せよ。

- 一 人に笑はるること勿れ。
- 二 人に後指ささしむるな。

三 玉も磨かざれば光無からむ。

四 訪ふべしと、彼人は言ひけり。

五 昨日も不在なりきと、人は言ひぬ。

次の空所に助動詞を入れよ。

一 人に譽め○○とも笑は○○こと勿れ。

二 勉強す○○と彼人は言ひ○○。

三 人の惡を言は○○と或人は語り○○。

四 なさ○と欲せば、なす事を得る○○。

第九章 形容詞

形容詞とは事物を形容する語なり。

山高く水清し。

赤き花咲けり。

月明に星稀なり。

親しき友來る。

右の文にて「高く清し」「赤き親しき」又は「明に」の如き詞は形容詞なり。

練習問題

次の文中より形容詞を指示せよ。

一 花紅に水青し。

二 白き花青き水の上に落つ。

三 黒き雲晴れて、月の光清し。

四 牛の歩は遅く、馬の歩は早し。

五 支那は面積も廣く、人口も多し。
次の空所に形容詞を入れよ。

- 一 水○○風○○。
- 二 ○○○友と交れば○○○友は遠ざかる。
- 三 ○○○松の間に○○○花見ゆ。

動詞助動詞形容詞の三つを併せて用詞といふ。
復習雜題

次の文中より用詞を指摘し、これを動詞助動詞形容詞に區分せよ。

- 一 塵も積れば山となる。
- 二 背に腹はかへられぬ。

- 三 死は易く生は難し。
- 四 梅檀は二葉より香し。
- 五 衣食足りて禮節を知る。
- 六 空は晴れぬいざ行かむ。
- 七 我歸りたりと知らしむべし。

第二編 用詞の詳説

九品詞の中最も大切なるは用詞なり。用詞は語尾の變化する詞にして、その語法甚だ複雑なり。これより順次に動詞助動詞及形容詞をくはしく説明せむ。

第一章 動詞

第一節 四段活

本を讀まむ。

本を讀みたり。

本を讀む。

本を讀め。

右の文にて「讀ま・讀み・讀む・讀め」は動詞にして、その語尾が「ま・み・む・め」と四たび變りたるを知るべし。語尾の變るを活なまき又は活用といふ。この活なまきは必ず五十音圖の同じ行に於てす。

五十音圖の同じ行の中にて、四度かはる動詞を

四段活といふ。前の文例にて「讀ま・讀み・讀む・讀め」は即ち四段活なり。

四段活の動詞は五十音圖中次の六行に活くものとす。

四段活 (阿列) (伊列) (宇列) (江列)

(一)	加行	書	か	き	く	け
(二)	佐行	増	さ	し	す	せ
(三)	多行	勝	た	ち	つ	て
(四)	波行	言	は	ひ	ふ	へ
(五)	麻行	讀	ま	み	む	め
(六)	良行	去	ら	り	る	れ

練習問題

次の語を活用せよ。

- 1 思ふ。 2 刈る。
- 3 摘む。
- 4 押す。
- 5 打つ。
- 6 聞く。
- 7 呑む。
- 8 走る。
- 9 咲く。
- 10 流る。
- 11 持つ。
- 12 行ふ。

第二節 四段活の音便

音便とは發音の便利より起れるものにして、これに伊音便・宇音便・促音便・撥音便の四種あり。

四段活動詞の伊列の語尾は音便となる。

(キ) 書きて を 書いて
 置きて を 置いて

(ギ) 仰ぎて を 仰いで
 泳ぎて を 泳いで

右の如く、きぎの語尾が、いに代はるものあり。これを伊音便といふ。

伊音便の語に、ひ又はみなどの文字を用ふべからず、書ひて「仰ゐて」など書くは誤なり。

關西地方にては、「推して」を「推いて」「差して」を「差いて」などいふ伊音便あれど、東京語には存せず。

(ヒ) 思ひて を 思うて
 従ひて を 従うて

右の如く、ひの語尾が、うに代はるものあり。これ

を字音便といふ。

字音便の語に、ふの文字を用ふべからず、「従ふて」

「争ふて」など書くは誤なり。

〔備考〕動詞の音便は「て」又は「た」の音に連なる時に起る。波行の動詞にて文章の終となる時は「ふ」と書くべし。思うて思うたは音便なれど、家と思ふ又思ふ事などいふ時は音便にあらず。

(ヒ)	養ひて	を	養。つて
	従ひて	を	従。つて
(チ)	持ちて	を	持。つて
	勝ちて	を	勝。つて
(リ)	去りて	を	去。つて
	取りて	を	取。つて

右の如く、ひ・ち・りの語尾をつめていふものあり。これを促音便といふ。

促音をあらはすには、文字を側に小記す。

〔備考〕ひの原音を字音便に呼ぶは關西語にして、促音便に呼ぶは關東語なり、例へば

買うて貰うた(關西)・買つて貰った(關東)の如し。

(ビ)	飛びて	を	飛。んで
	悦びて	を	悦。んで
	呼びて	を	呼。んで
(ミ)	飲みて	を	飲。んで
	望みて	を	望。んで

右の如く、びみの語尾を、んにいふものあり。これを撥音便といふ。

撥音便には、む文字を用ふべからず。飛むで「讀む」など書くは誤なり。

以上列記したる所により、四段活動詞の音便の種類を一括して表につくれば、左の如し。

	原	
	音	音便
伊音便	き	ぎ
字音便	ひ	
促音便	ひ	ちり
撥音便	び	みん

練習問題

次の文章より、音便を指示して、これを種別せよ。

- 一 笑って應へず。
- 二 悦んで歸った。
- 三 富んで驕らず。
- 四 一を聞いて十を知る。
- 五 雨降って地固まる。
- 六 並んで進んだ。
- 七 勝つかぶとの緒をしめよ。
- 八 馬には乗って見よ、人には添うて見よ。

次の音便の假名の誤れるものあらば正せ。

追ふて行く。 悲むで泣く。 悦んで笑ふ。

書ひて見る。 思ふて見よ。 高く飛むだ。

川を泳むだ。

第三節 上二段活及下二段活

およそ動詞は五十音圖の同行に於て活くものなること、前の四段活の例に因りて知るべし。されば、動詞の活きを知らむには、まづ五十音圖を縦横に暗んぜざるべからず。

阿行	加行	佐行	多行	奈行	波行	麻行	也行	良行	和行
(ア)列阿	カキクケ	サシスセ	タチツテ	ナニヌネ	ハヒフヘ	マミムメ	ヤイユエ	ラリルレ	ワヰウヱ
(イ)列伊	(ウ)列宇	(エ)列江	(オ)列於	(カ)列加	(キ)列奇	(ク)列古	(ケ)列可	(コ)列可	(ク)列可

阿行	加行	佐行	多行	奈行	波行	麻行	也行	良行	和行
(あ)列阿	かきくけ	さしすせ	たちつて	なにぬね	はひふへ	まみむめ	やいゆえ	らりるれ	わゐうゑ
(い)列伊	(う)列宇	(え)列江	(お)列於	(か)列加	(き)列奇	(く)列古	(け)列可	(こ)列可	(く)列可

右の五十音圖中括弧をつけたる假名は、決して動詞の語尾とならぬものなり。

五十音圖中最も假名遣の紛はしきは

阿行 波行 也行 和行

の四行なりとす。

又濁音の假名遣にて紛はしきは、佐行・多行の二つとす。即ち次に示すが如し。

バ	ダ	ザ	ガ	ビ	ヂ	ジ	ギ	ブ	ズ	ズ	グ	ベ	デ	ゼ	ゲ	(ボ)	(ド)	(ゾ)	(ゴ)
				ば	だ	ざ	が	び	ぢ	じ	ぎ	ぶ	で	ぜ	げ	(ぼ)	(ど)	(ぞ)	(ご)

年老いても衰へず。

年すでに老ゆ。

右の文にて「老い・老ゆ」は五十音圖中也行の伊列と字列と二段に活きたる動詞なり。

門を出でて月を見る。

山の頂より月出づ。

右の文にて「出で」は五十音圖中多行の江列と字列とに活きたる動詞なり。

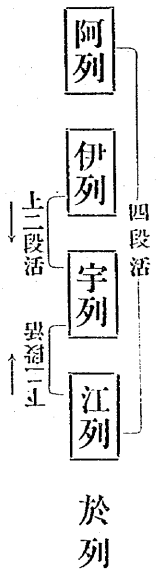
伊列と字列とに活きたる上二段活といひ、江列と字列とに活きたる下二段活といふ。

上二段活及下二段活は、なほ字列に「及」れを添

へたるものを、その語尾とす。例へば

古い 老ゆ 老ゆる 老ゆれ (上二段活)
出で 出づ 出づる 出づれ (下二段活)

なほ四段活と上二段活及下二段活との相違を
圖にて示せば、次の如くなるべし。



上二段活の動詞は、五十音圖に於て次の六行に
活くものとす。

上二段活

(一)	加行	起	き	く	くる	くれ
(二)	多行	落	ち	つ	つる	つれ
(三)	波行	生	ひ	ふ	ふる	ふれ
(四)	麻行	恨	み	む	むる	むれ
(五)	也行	老	い	ゆ	ゆる	ゆれ
(六)	良行	懲	り	る	るる	るれ

下二段活の動詞は五十音圖のすべての行に活
くものとす。即ち次の表の如し。

下二段活

(一)	阿行	(得)	え	う	うる	うれ
(二)	加行	受	け	く	くる	くれ

のあり。即ち

立た	立ち	立つ	立て	(四段活)
(三)	佐行	失せ	す	すれ
(四)	多行	隔て	つ	つる
(五)	奈行	兼ね	ぬ	ぬる
(六)	波行	堪へ	ふ	ふる
(七)	麻行	求め	む	むる
(八)	也行	絶え	ゆ	ゆる
(九)	良行	枯れ	る	るる
(十)	和行	植ゑ	う	うる

同じ動詞にて、四段活にも下二段活にも活くも

練習問題

立て 立つ 立つる 立つれ (下二段活)

次の語を活かせて、その上二段活なるか下二段活なるかを告げよ。

- 1 閉づ。 2 失す。 3 隔つ。 4 恨む。
- 5 譽む。 6 飢う。 7 生く。 8 過ぐ。
- 9 設く。 10 起く。 11 報ゆ。 12 出づ。

次の文中動詞の語尾の假名遣に誤あらば正せ。

- 一 恩に報ひよ。
- 二 怖じ恐れて家にかへる。

- 三 訪ふ人絶へず。
 - 四 教ゆる人に習ふべし。
 - 五 人の悪を言わず。
 - 六 月出ずれば燈を要せず。
 - 七 庭に木を植ゆ。
 - 八 視れども見へず。
 - 九 飢ゆるものに食を與ふ。
- 次の語を四段活と下二段活と二様に活かしめよ。

- 1 進む。
- 2 退く。
- 3 切る。
- 4 沈む。
- 5 開く。
- 6 忍ぶ。
- 7 延ぶ。
- 8 満つ。

第四節 上二段活及下二段活

花を見む。

花を見る人あり。

見れども飽かず。

右の文にて「見・見る・見れ」は五十音圖の伊列にのみ活き、これに「る・れ」の添はりたるものなり、かゝる類の動詞を「上二段活」といふ。

汽船は波を蹴て行く。

足にて「まり」を蹴る。

蹴れども傷まず。

右の文にて「蹴・蹴る・蹴れ」は五十音圖の江列にの

み活き、これに「る」の添はりたるものなり、これを
下一段活といふ。

上一段活の動詞はその種類あまり多からず。次
にその表を示さむ。

上一段活

(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(六)
加行	奈行	波行	麻行	也行	和行
(著)	(似)	(干)	(見)	(射)	(居)
き	に	ひ	み	い	ゐ
きる	にる	ひる	みる	いる	ゐる
きれ	にれ	ひれ	みれ	いれ	ゐれ

下一段活の動詞は蹴るの一語あるのみ。但し文
語の下二段活は、口語にてはすべて下一段活とな
る。即ち次の如し。

(得)	受	失	隔	兼	堪	求	絶
え	け	せ	て	ね	へ	め	え
える	ける	せる	てる	ねる	へる	める	える
えれ	けれ	せれ	てれ	ねれ	へれ	めれ	えれ

枯 れ れる れれ
植 ゑ ゑる ゑれ

練習問題

次の語を文語の上一段活及口語の下一段活に活かしめよ。

- 1 見る。
- 2 枯れる。
- 3 植ゑる。
- 4 榮える。
- 5 鑄る。
- 6 率ゐる。
- 7 考へる。
- 8 教へる。
- 9 心得る。
- 10 受ける。
- 11 責る。

第五節 變格の動詞

四段活・上二段活・下二段活・上一段活及下一段活

の動詞は規則正しく活くがゆゑに、これを正格の動詞とす。

こゝに規則正しく活かざる動詞あり、これを變格の動詞といふ。

變格の動詞には次の四種あり。

加變 (來) こ き ㊦ くる くれ
 佐變 (爲) せ し す する すれ
 奈變 死 な に ぬ ぬる ぬれ(ね)
 良變 有 ら り る れ

加變・佐變・奈變・良變とは加行・佐行・奈行・良行の變格といふ義なり。

加變の「く」は古文に用ひたる語なり。今文にて、この場合に來るといふ四段活の語を用ふ。

佐變には漢語の來りて動詞となるもの頗る多し。例へば

勉強す。奮發す。教育す。散歩す。

感ず。任ず。奉ず。

など、殆ど數へつくすべからず。

良變と四段活良行と異なる點は、文の終止となる場合にあり。

犬は走る。

こゝに机あり。

即ち良行四段活は「る」の語尾にて文の終止となれども、良變にては「り」の語尾にて終止となる。なほくはしくは次巻に述べし。

但し口語にては、良變は四段活となる。即ち「こゝに机がある」といふが如く、「る」の語尾にて文の終止となる。

文語の奈變も、口語にては四段活となる。即ち

死な 死に 死ぬ 死ぬ

の如く、奈行の四段に活くものとなる。

練習問題

次の語を變格に活用せよ。

- 1 養育す。
- 2 運動す。
- 3 裁縫す。
- 4 禁ず。
- 5 散ず。
- 6 來。
- 7 往ぬ。
- 8 居り。

次の文語を口語に改めよ。

- 一 こゝに本あり。
- 二 毎日本人來る。
- 三 死ぬる人多し。
- 四 毎朝運動をす。
- 五 字を書きて居り。

第六節 形容動詞

良變には形容詞の來りて動詞となるものあり。

これは善からず。

これは善かりき。

これは善かり。

これは善かるべし。

これは善かれども價高し。

右の文にて「善から善かり善かり善かる善かれ」といふ語は、もと形容詞の「善く」といふ語が、良變と結合して成れる語なり。これをかり活といふ。

月明ならむ。

月明なりき。

月明なり。

月明なるべし。

月明なれば、星見えず。

右の文にて「明なら明なり明なり明なり明なる明なれ」といふ語は、もと形容詞の明にといふ語が、良變と結合して成れる語なり、これをなり活といふ。

月皎々たらさず。

月皎々たりき。

月皎々たり。

月皎々たる夕に遇ふ。

月皎々たれども、訪ふ人もなし。

右の文にて「皎々たら皎々たり皎々たり皎々たり皎々たる皎々たれ」といふ語は、「皎々と」といふ副詞と、良變と結合して成れる者なり、これをたり活といふ。以上の「かり活なり活たり活」の三つを併稱して形容動詞といふ。

なり活及たり活といふ一品詞と、助動詞のなり及たりとを混同すべからず。

この花は美麗なり。

これは櫻の花なり。

これは美麗なる花なり。

河内の國なる大河なり。

風雨蕭々たり。

かれは學生たり。

學校に行きたり。

燦然たる光を放つ。

螢に似たる光を放つ。

學生たるものは、行を正しくすべし。

右の文にて、單線を附けたるは形容動詞にして、
圈點をうちたるは助動詞なり。

練習問題

次の文より形容動詞を指示せよ。

- 一 盛んなるものは久しからず。

- 二 これは完全なる手本なり。

- 三 日本の櫻花は美麗なり。

- 四 堂々たる議論をなす。

- 五 更に異なる所なし。

- 六 稀なるものは必ずしも宜しからず。

- 七 騎馬の兵士は意氣揚々たり。

次の文中より形容動詞と名詞及助動詞とを
區別せよ。

- 一 學者たるべき人少なし。

- 二 鐵中の鏘々たる者なり。

- 三 これは筆なり、鉛筆ならず。

- 四 彼は完全なり、此も不完全ならず。
- 五 見たることあれど、食ひたる事なし。
- 六 彼もし堂々たらずとも、我は従容たらむ。

◎復習雜題

次の文中より動詞を指摘し、その何段活に屬するかを告げよ。

- 一 稼ぐに追付く貧乏なし。
- 二 よく泳ぐものは水に溺る。
- 三 朱に交はれば赤くなる。
- 四 驕るものは久しからず。
- 五 視れども見えず、聽けども聞えず。

- 六 身を立て道を行ひ、名を後世に揚ぐ。
- 七 金剛石も磨かずば、玉の光は添はざらむ。
- 八 人も學びてのちに、誠の徳は顯はるれ。

第二章 助動詞

第一節 受身 可能 使役 敬語

- (一) 一人に尊ばる。
- (二) 人に譽めらる。
- (イ) 行かば行かる。
- (ロ) 受けば受けらる。

右の文にて、(一)のる、(二)のらるは受身の助動詞にして、(イ)のる、(ロ)のらるは可能の助動詞なり。受身と可能との助動詞は、その形全く同じければ、文章の意義の上にてこれを區別すべし。受身及可能の助動詞の活きは次の如し。

受身	れ	る	るる	るれ
可能	られ	らる	らるる	らるれ

家を興さす。
 名を揚げさす。
 家を建てしむ。

右の文にてす、さす、しむは使役の助動詞なり。而

して、その活きは次の如し。

使役	せ	す	する	すれ
	させ	さす	さする	さすれ
	しめ	しむ	しむる	しむれ

又可能と使役との助動詞は、敬語となる場合あり。

君は、よく歌を讀まる。
 先生は、われらを教へらる。
 わが師は、よく字を書かせたまふ。
 將校は、兵士に案内させたまふ。
 殿下は、御成績優等にて賞状を得しめたまふ。

などは、皆可能及使役の助動詞と同じ形にて、敬語の助動詞となれるものなり。

練習問題

次の中より、受身・可能使役の助動詞を指摘せよ。

- 一 人に後指ささるるな。
- 二 字を寫さしむ。
- 三 渡らば渡らるべし。
- 四 人にあがめらるる身となれ。
- 五 人に新聞を讀ませて聞く。
- 六 大工に家を建てさせて、家族を住ましむ。

七 負傷兵は、赤十字社病院に送られたり。
八 盜賊に忍び入られて、衣服を盗まれたり。
次の文を敬語體に改めよ。

- 一 殿下は花を見る。
- 二 國王は遊獵を好む。
- 三 知事も臨場す。
- 四 母は音樂を嗜む。
- 五 殿下は公衆の歡迎を受く。
- 六 わが師は能書にて善く字を書く。

第二節 打消 推量 當然

決して人を誹らず。

音楽は未だ學ばざりき。

右の文にて「ず」及び「り」は打消の助動詞なり。而してその活きは次の如し。

打消 ず ぬ ね
 ざら ざり ざる ざれ

雨も降るらむ、風も吹くらむ。

右の文にて「らむ」は推量の助動詞にして、その活きは次の如し。

推量 らむ らめ
危き所には近寄るまじ。

師の教をよく守るべし。

命令には従ばざるべからず。

右の文にて「まじ」べし及「べから」は當然の助動詞にして、その活きは次の如し。

當然 まじく まじ まじき まじけれ
 べく べし べき べけれ
 べから べかり (べかる) (べけれ)

練習問題

次の文中より打消、推量及當然の助動詞を指摘せよ。

- 一 蒔かぬ種は生えぬ。

- 二 わけを知らねば面白からず。
- 三 道行はれざれば去るべし。
- 四 雨や降るらむ、風や吹くらむ。
- 五 行ふまじき事は、行ふべからず。
- 六 金剛石も磨かずば、玉の光は添はざらむ。

第三節 時 指定

時に現在と過去と未來とあり。現在は動詞のままにして、過去と未來とは助動詞を以てあらはす。

花を折りつ。

花散りぬ。
 花咲けり。
 花咲きたり。
 きのふも行きけり。
 刺繡は未だ學ばざりき。
 右の文にてつぬりたりけりきは過去の時をあらはす助動詞なり。
 明日も學校に行かむ。
 遠き慮なくば近き憂あらむ。
 右の文にてむは未來の助動詞なり。
 過去及未來を示す助動詞を併せて時の助動詞

及たり活とは、その語尾同じければ、混同せざるや
う注意すべし(本書第四十
三頁參考)

練習問題

次の文中より時及指定の助動詞を指摘せよ。

- 一 煩しければ、省きつ。
- 二 尋ねしかども、見當らざりき。
- 三 庭の櫻はすでに散りけり。
- 四 花の散れる庭に雨は降りぬ。
- 五 ありし昔にくらべ見む。
- 六 君君たらずども、臣は臣たるべし。
- 七 これは桃の花なり、櫻の花にあらず。

次の文中より助動詞を指摘し、これを受身・可
能使役・打消・推量・當然・時指定に種別せよ。

- 一 岸の姫松幾代へぬらむ。
- 二 舊りぬるものは、わが身なりけり。
- 三 行かしまむべかりしを、行かせざりき。
- 四 人に尊ばれむと思はば、まづ徳を修むべし。
- 五 空は曇りぬ、雨や降るらむ。
- 六 花をながめつる人は去りにけり。
- 七 行くべきか行くまじきかを考へぬ。
- 八 行かむか退かむかと迷ひたり。
- 九 昨日は雨天なりしが、明日は晴天ならむ。
- 十 そは余が學生たりし時に、聞きたる話なり。

第三章 形容詞

第一節 形容詞の種類

川淺くば涉らむ。

この川は淺し。

淺き川は涉らるべし。

川淺ければ涉る。

右の文にて「淺く淺し・淺き・淺ければ」は形容詞にして、これを久活といふ。

梨の花は美しくはあらず。

櫻の花は誠に美し。

美しき花は八重の櫻なり。

花は美しけれども、匂は少なし。

右の文にて「美しく美し美しき美しければ」は形容詞にして、これを志久活といふ。

月明に、星稀なり。

花は盛りに、月は隈なし、

右の文にて「明に盛りに」は形容詞にして、これを仁活といふ。

久活と志久活とは最も廣く用ひらる。又その「く語尾と動詞あり」と合して、形容動詞の「かり活」とな

ること、前にいへるが如し。

仁活は語尾の活きなく、形容動詞のなり活となりて、その用途廣きものとす。

形容詞の活きを表に作れば、次の如し。

高 く し き けれ (久活)

悲 しく し き しけれ (志久活)

明 に ○ ○ ○ (仁活)

練習問題

次の文中より形容詞及形容動詞を指摘せよ。

- 一 山高く、水清し。
- 二 價安ければ、買ふべし。

三 水は緑に、花は紅なり。

四 美しき櫻の花咲きぬ。

五 面白き事もあれば、悲しき事もあり。

六 花に赤きものと白きものとあり。

七 黄なる花はあれど、黒き花はなし。

八 苦しき目に遭ひたれど、悲しからず。

九 この川は深けれど、かの川は深からず。

第二節 形容詞の口語及音便

文語形容詞の「く」の語尾は字音便となり、「し」又は「き」の語尾は伊音便となる。

形容詞の文語及口語を對照すれば、次の如し、

高	く	し	き	けれ	(文語)
う	い	い	い	けれ	(口語)

樂	しく	し	し	しけれ	(文語)
し	し	し	し	しけれ	(口語)

明	に	○	○	○	(文語)
○	○	な	○	○	(口語)

形容詞「く」の語尾は、そのままにて副詞となる。

山高形容詞く水清し。

高く副詞飛ぶ。

「く」語尾が字音便となる時、形容詞と副詞とあり。

山高形容詞うして水清し。

山が高副詞う御座います。

仁活は口語にて「な」となり、常に名詞を形容す。

綺麗形容詞な花。

立派形容詞な花。

の如し。

練習問題

次の文中より形容詞の口語及音便を指摘せよ。

- 一 山青くして花燃えむとす。
- 二 川深うして渉るべからず。

- 三 青い松の間に、赤い花が咲いた。
- 四 丈夫な人も、弱い所があります。
- 五 冷しい風にあたるのが楽しい。
- 六 ひもじい時にまづいもの無し。

次の文中の形容詞と副詞とを區別せよ。

- 一 よく遊びよく學ぶ。
- 二 これもよく彼もよし。
- 三 見るも面白く、聞くも樂し。
- 四 誠に面白う御座いました。
- 五 牛の歩は遅く、馬は早し。
- 六 誠に遅くなりて濟みません。

復習雜題

次の問に答へよ。

- 一 動詞の活きに幾種類あるか。
 - 二 變格動詞の活きを示せ。
 - 三 形容動詞の種類を問ふ。
 - 四 助動詞の種類を列記せよ。
 - 五 時及當然の助動詞の活きを示せ。
 - 六 形容詞の種類及活きを示せ。
 - 七 動詞及形容詞の音便を列記せよ。
- 次の文を品詞に分かて。

- 一 美しき 花 咲き ぬ。

236
82

K230.8

訂改 女子國語新文典 上卷 をはり

二 更に 知ら ざり けり。
 三 それ は 面白かる べし。
 四 譽らる とも 誇ら ず。
 五 嗚呼 今年 も 遂に 暮れ たり。
 六 言ふ は 易し。 されど 行ふ は 容易 ならず。

明治十一年	明治十二年	明治十三年	明治十四年	明治十五年	明治十六年	明治十七年	明治十八年	明治十九年	明治二十年	明治二十一年	明治二十二年	明治二十三年	明治二十四年	明治二十五年	明治二十六年	明治二十七年	明治二十八年	明治二十九年	明治三十年
初版	初版	初版	初版	初版	初版	初版	初版	初版	初版	初版	初版	初版	初版	初版	初版	初版	初版	初版	初版
訂正	訂正	訂正	訂正	訂正	訂正	訂正	訂正	訂正	訂正	訂正	訂正	訂正	訂正	訂正	訂正	訂正	訂正	訂正	訂正
發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行	發行

複製許

發行所

東京市日本橋區本銀

株式會社

成社

振替口座東京二〇五五番
電話本局二一〇〇番

著者 高橋 龍雄
 印刷所 東京市日本橋區本銀町三丁目二番地
 代表者 藤田 國次郎
 印刷所 東京市神田區表神保町二番地
 代表者 遠藤 文堂

訂改女子國語新文典
 上卷定價八十錢

